

新宿 今井治郎三郎家について

『朝日町史編集資料第六号 今井治郎三郎家文書(上)』『朝日町の歴史』(朝日町教育委員会刊)によると、初代今井左衛門兼満は鳥屋ヶ森城主の岸美作守義光の家老を先祖とし、代々新宿村の肝煎名主・大庄屋として精働し、天保年間(1830～)以降には在方荷主(買次問屋)として青苧集荷商や土地の集積に着手したとあります。

特に14代今井治郎三郎は、地元新宿で生糸製造会社を設立するのみならず、横浜を拠点に蚕糸貿易の大事業を行い、史編集資料には「膨大な財力を利用して諸種の事業に関与し、その明敏な頭脳と非凡な才腕をふるい、努力奮闘し、蓄財益々加えた」と紹介されています。また、奥羽鉄道の誘致や、電気事業、通信事業の促進など、郷土の振興にも大いに尽力し、明治時代後半に生糸が暴落するまでは、今井家がかつても隆盛を誇った時代といえます。

その活躍ぶりを以下、年表にしてみました。

- 安政 4年(1857) 11月生まれ。幼名政吉。
- 明治 3年(1870) 父嘉兵衛の死により、13歳で家督をつぐ。
- 明治 10年(1877) (株)良進社を新宿に興し、10年以上にわたり生糸の機械製造を行う。
- 25年(1892) 横浜市弁天通で蚕糸貿易商となる。人望高く横浜取引所仲買委員長を七回、横浜商業会議所議員も勤め副会頭にもなる。
宮宿まで電信を架設するため、西村山郡会議員や県議会議員の地位を活用して促進にあたる。
- 31年(1898) 山形電気株式会社設立に尽力、重役となる。
(年代不詳) 奥羽本線鉄道の誘致に奔走。板谷峠トンネル工事に際しては、自ら煉瓦工場を設置し資材を供給する。
- 42年(1909) 今井五郎八に協力して「今井商業銀行」の創立に出資、および運営指導にあたり、地方金融に多大の貢献をする。
- 大正元年(1928) 生糸の暴落により、横浜取引所を整理し新宿に戻る
- 2年(1913) 山形電気会社で白岩町の白岩発電所、西五百川村の旭発電所を建設する。
- 8年(1919) 川土居村の吉川発電所を建設する。

その後も今井家は、15代は東五百川村長、16代は宮宿町長を勤めるなど、引き続き地方自治に功績を残された家柄で、ご子息は昭和40年代に資産を整理し新宿をはなれ東京都内に生活されています。



大正初期の
今井治郎三郎家の正門
(今井孝一郎氏所蔵)
※右側に大きな蔵が見えます

(制作/NPO 法人朝日町エコミュージアム協会)